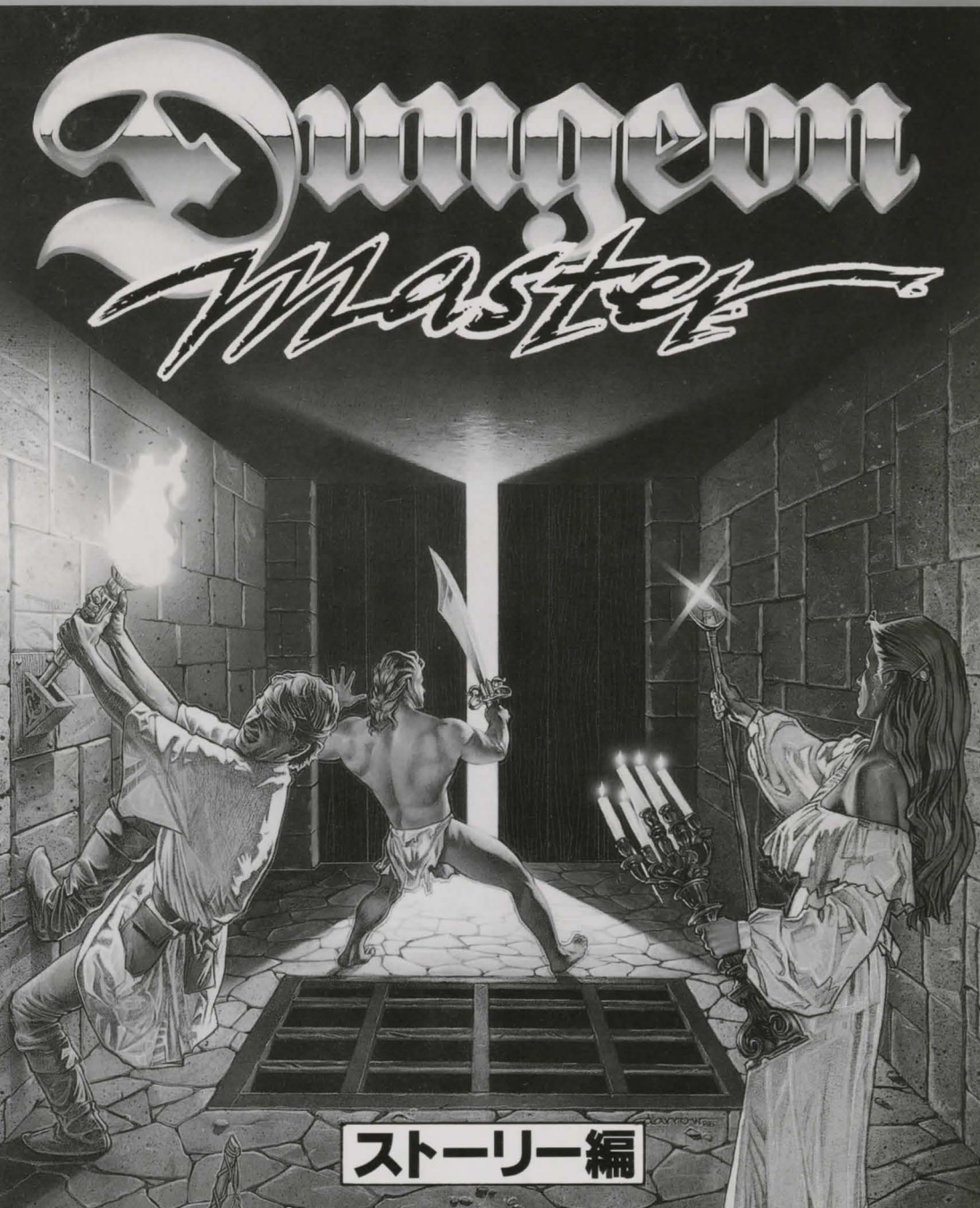
FM TOWNS ソフトコレクション海外編2

ダンジョン・マスター

Dungeon Master



ストーリー編

1. セロン

聖なる山、アナイアス山。
その麓に、偉大なる魔術師グレイロードの洞窟(ダンジョン)があった。

グレイロード(*Grey Lord*)のダンジョンは静まり返っていた。大ガラス、フルクルム(*Fulcrum*)のはばたきが、ときどきその静寂を破る。

たいまつのやわらかな光が、ガラスケースに収められた「炎の杖(*Firestaff*)」を照らしている。柄に埋め込まれた真紅のルビーが、星座図にかがみ込むセロン(*Theron*)を見つめていた。

午前5時を告げる鐘がダンジョンの奥深くから響く。それを聞くと、セロンは星座図を作る手を止めて、ため息をついた。

「5時か・・」

偉大な師、グレイロードはいつまで実験室(*Laboratory*)にこもっている気だろう？　セロンは満月の晩に師からある使いを言い渡されていた。ヴィボルグ(*Viborg*)にいる魔女のもとへ、ヘンナロープ(*Henna rope*)を受け取りに行くように、というのだ。重要な、しかも困難な仕事だ。彼には自信がなかった。

「でも、」と彼は思う。これは僕のための試練なのだ。師は、たくさんの候補の中から僕を選んでくれた。そのとき僕に、宇宙の調和と物理の神秘を教え、あらゆる魔術のアーチ・マスター(*Arch Master*)にすると約束してくれたんだ。それに、ヴィボルグには愛するひとヴェイラ(*Vayla*)がいる・・。

6時の鐘が鳴ったとき、セロンは待ち切れずに立ち上がった。グレイロードは、あの満月の晩以来、三日も閉じこもったままだ。

息を殺し足音を忍ばせながら、師の実験室に近づいて扉を静かに叩いた。

「先生、セロンです。出かける準備ができました。」

彼は思い切って声をかけた。

返事がない。彼は耳をすませた。ガラスの触れ会う音、火のはじける音、煙が吹き出すような音。扉の下から強烈なマナ(*Mana*)の香りがただよってくる。彼は深く息を吸い込み、それを味わった。

師は、重要な実験に没頭しているらしい。

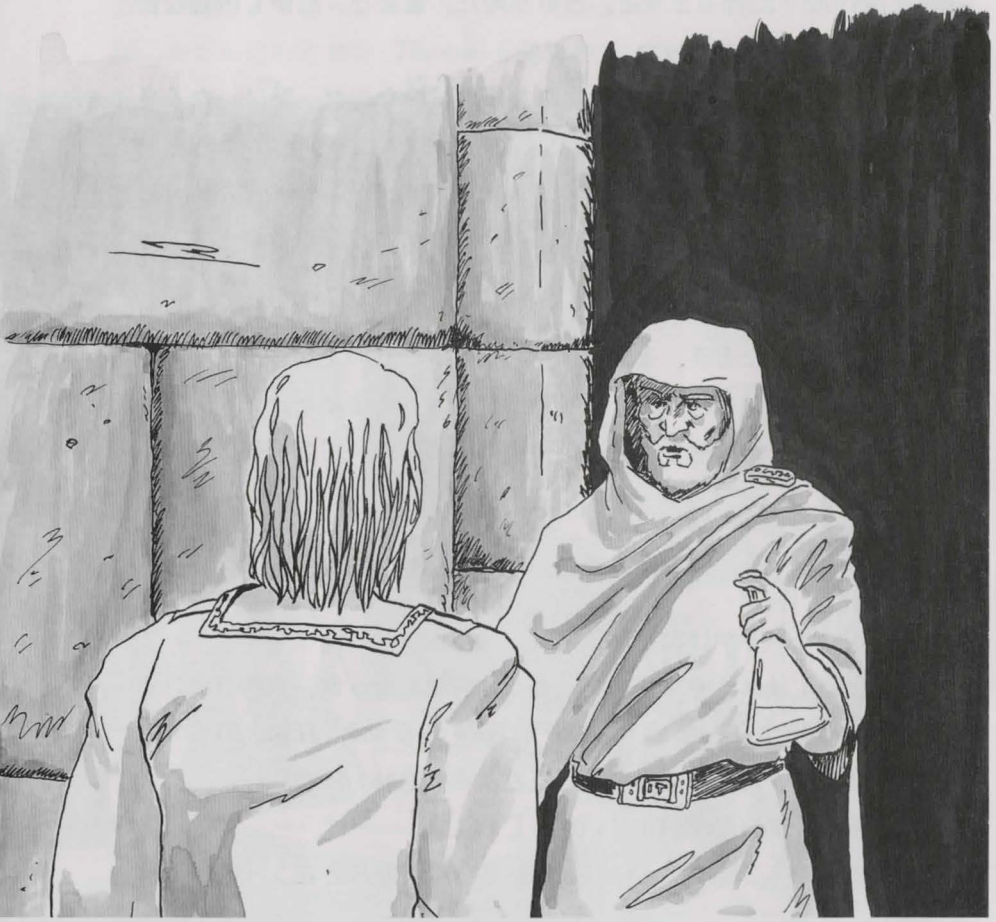
扉の向こうから、ぶつぶつと呟くような声が聞こえたような気がする。

「聞こえておるよ、セロン。返事をする暇を与えてくれ。気の短い奴だ」

彼は後退りしながら答えた。

「お許しください・・」

実験室の扉がゆっくりと開く。中は漆黒の暗闇だ。数々の神秘の技を生みだした偉大な魔術師の実験室。その中の様子を、何度夢見たことだろう。この中で働けるなら、すべてを投げうってもかまわないのに・・



「お邪魔をするつもりはありませんでした。ただ、私は・・」

「謝るにはおよばぬ。若い頃のはやる気持ちは私も覚えておるよ。それに、ヴェイラのような美しい娘が待っておるなら、いまごろはお前のように気がせいているだろうからな」

セロンは師を見上げた。あの見慣れた夢見るような表情を浮かべている。

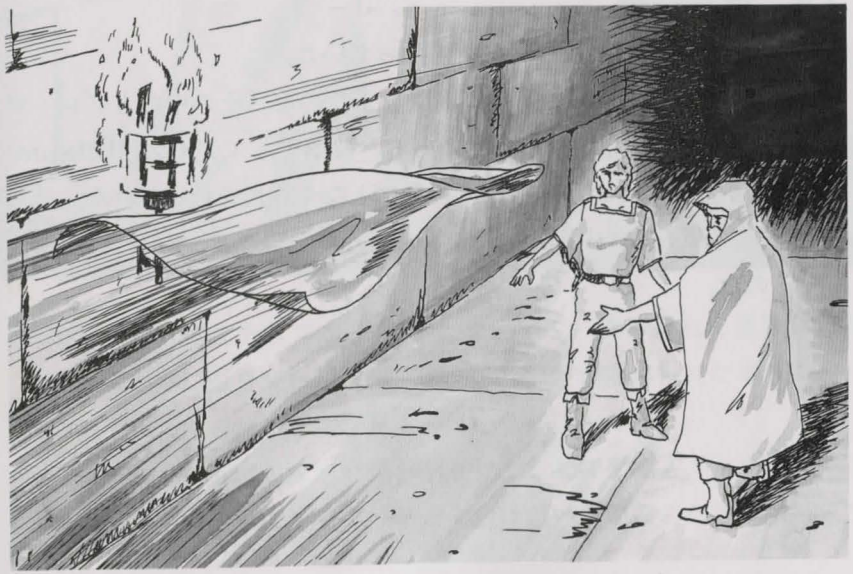
師は淋しくはないのだろうか？　彼はよくそう思った。ここ、聖なるアナイアス山には、人々はあまりやってこない。グレイロードは永い年月にわたって、この洞窟で隠遁生活を送っているのだ。

しかし、ここはパワージェム(*Power Gem*)が眠っているところだとも伝えられている。パワージェム、それは命の源。氷を溶かし、その中から小人や妖精、人間を蘇らせた。グレイロード自身もパワージェムの力によって目覚めたのだという。

「さて、お前はもう行かねばならぬ。そしてヘンナロープを取ってくるのだ」

師が話し始めたので、セロンはその思いを追い払った。グレイロードは手を上げながら言った。

「マントを着なさい」



すると、エメラルドで飾られた木製の戸棚が開き、中にあった銀に輝く魔法のマントが空中を漂ってセロンの体にまとわりついた。

師はセロンの肩にマントを合わせ、頭にそっとフードをかぶせた。

「調和を忘れずに行くのだぞ、セロン」

セロンはひざまずいた。

「はい、落ち着いて行きます。我が王よ」

その言葉を聞くと、グレイロードはかすかに眉をひそめた。

「私はお前の師であって、王ではない。何度言ったらわかるのだ。」

「私は、お前達より偉いというわけではない。私や私の仲間も、他の人間達と同じように氷に閉じ込められていたのだ。ただ、魔術師達の中にも、我々は力があって人間とは違うのだ、と吹聴している者がいるらしい。残念なことだ」

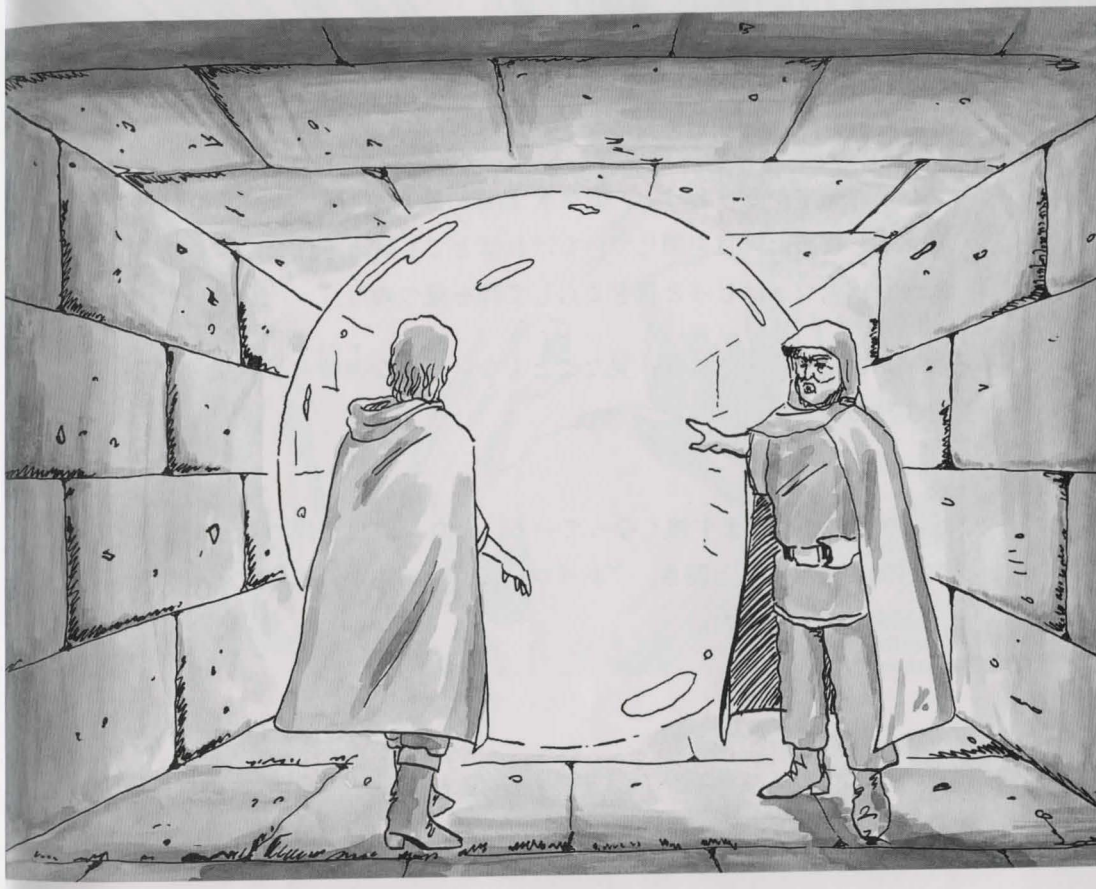
「判りました、グレイロード」

だが、彼はまた、そうでないことも知っていた。

魔術師たちは実は神であり、高貴な王なのだ。その中でもグレイロードは最も偉大な力を持った王である。彼はウィスデイン(*Whisdain*)によって引き起こされた戦争から、幾度となく人民を救っていた。そして今は、アナイアス山(*Mt.Anaias*)のもとで宇宙の調和のために働いているのだ。

二人は水晶球の前に立った。水晶球はあらゆる世界に通ずる旅の入り口である。

「水晶球へ入りなさい」



セロンは、微光を放つ水晶球の壁を通して、住み慣れた部屋を見渡した。師と共に盃を交わした机、驚異の魔術が納められた本がつまっている棚・・。これらを次に見るのはいつのことだろう。

彼はまた、輝きに包まれた師の顔を見た。呪文を唱え、セロンを見守る師の目は、かすかに光っている。先生は泣いているのだろうか・・?

すると、グレイロードは突然手を広げて叫んだ。

「セロン、見付けたぞ！！」

セロンは思わず息を呑み、たずねた。

「パワージェムをですか？」

「そうだ、思った通り山の炎のなかにある」

グレイロードがそう言うと、突然水晶球の輝きが増し、セロンは目がくらんでしまった。目を閉じていなければとても耐えられない。

しかし、セロンはじっと目をこらして師を見つめた。

「次にお前に会うときには、見たこともないような素晴らしい夜明けを見せてやろう！」

水晶の輝きはますます強くなっている。セロンが目を細めると、ガラスの容器がゆっくりと開き、グレイロードがその中から炎の杖を取り出そうとするのが見えた。

「いけません！先生！！」

セロンは水晶の壁を叩いてさけんだ。

「私が留守の間にパワージェムを引き出すおつもりですか！　私を待っていてください。やめてください！　先生！！」

燃え上がる水晶の中で、セロンは見た。月と太陽、そして彼の周りをかけめぐる星々を。

周囲の光りは、もはや白ではなく、銀でもない。それはまるで人魂のように、そして祖先を生みだした氷のように白熱していた！

セロンは目を覆い、ひざまずいた。今までに出会ったことのないような強力で邪悪なマナが彼を打ちのめした。彼は水晶球の中で倒れ、光の中から暗黒へと落ちて行った。

2. ヴェイラ

ふと我にかえると、セロンは木のうろの中にいた。

ここは、魔法の樫の木の中だ。僕は無事にヴィボルグに着いたらしい・・

でも、なにか大事なことを忘れているような気がする。なんだっただろう？　師に関係のある、とても不安なことだ。そういえば、旅に出る前になにか起きたっけ？　よく思い出せない・・

首をさすりながら起き上がって外に出た。あたりには、リンゴの花が舞落ちて真白だ。

上の方からくすくすと笑う声が聞えた。見上げると愛しいヴェイラが樫の枝の上から見おろしている。

「元気だった？　セロン。ずっと待っていたのよ」

待っていた・・？　そうだ、待つことと関係のある。僕は師に待ってくれ、とたのんだ。でも、なにを？　・・

「セロン！　ここから降りるのを手伝ってくれないの？」

頭をひとふりして気をとりなおす。何であれそのうちに思い出すだろう。

セロンはヴェイラを見上げてほほえんだ。

「マントを脱ぐ時間をおくれ。このマントにさわると火傷するの知ってるだろう」

セロンはマントを枝に掛け、ヴェイラを腕に抱きしめた。彼女はリンゴとバラの花の香りがする。

セロンは恋人の髪に顔を埋めてささやいた。

「ヴェイラ・・
君と一緒にここにいたい。でも、先生のためにやらなくてはならない仕事があるんだ」

「でも、グレイロードがあなたに、お父様の家に泊るようお言い付けになった、と言っていたじゃないの」

「そんなこと僕が言ったかい？」

「ええ、おぼえてないの？」

セロンはぼんやりとヴェイラの髪をなでた。なにかおかしい。こんな大事なことを忘れているなんて。ほかになにか・・

「さあ、行きましょう。お母様があなたのために御馳走を用意しているのよ。
魔女もヘンナローブを用意してあなたを待っているわ」

ヴェイラはセロンの手をにぎって引張った。セロンは言われるままにヴェイラの家へと向った。

使命を果したセロンは、久しぶりに会ったヴェイラの両親との晩さんを楽しんだ。
その晩、セロンは満ち足りた気分で眠りについた。

セロンは夢を見た。

焼け焦げた灌木におおわれた丘に立つセロン。周りの木々は黒く焼けただれ、かつては美しかったであろう周囲は、いまや見るかげもない。

空が炎で赤く染っている。前方で村が燃えていた。

「あれは、僕の村だ！」

セロンは村へ走った。

村には悲鳴とも嘆きともつかない声が満ち、すでに廃虚と化していた。兵士たちが幼い子供を追いかけ、捕まえている。

雷鳴があたりにとどろいた。激しい風と雨がセロンを襲う。彼はきつく眼をつぶって叫んだ。

「これは夢だ　夢なんだ！！」

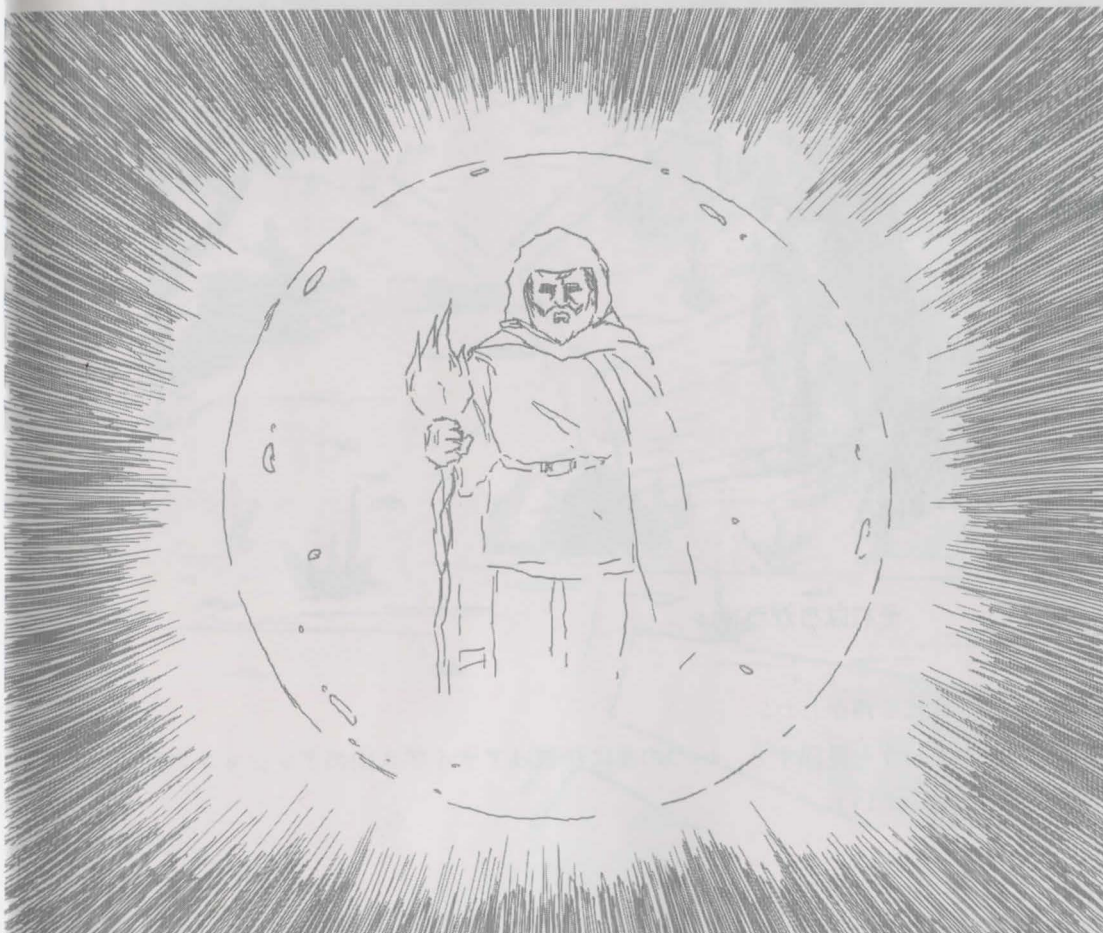
眼を開けると、セロンは宙をただよっていた。兵士たちが地上を駆けているのがみえる。戦争、飢餓、疫病、見渡す限りの惨劇と苦悩が、世界を破壊している。

恐怖に駆られ彼は走った。破壊された家や木々が飛ぶように通り過ぎて行く。凍るような雨がセロンを打ち付け、激しい風が彼を痛めつけた。

気がつくと彼は叫んでいた。

「やめてください　グレイロード！　私が帰るまで待っていてください！」

3. リブラスルス



セロンは腕を前に差し出した。向うが透けて見える。僕の体が透明になっているんだ！

「これは夢だ　悪い夢を見ているにちがいない」

そうだ。パワーが増すと強い幻覚が夢の中にも現われるようになると、グレイロードが警告してくれたっけ・・

耳元で声がした。

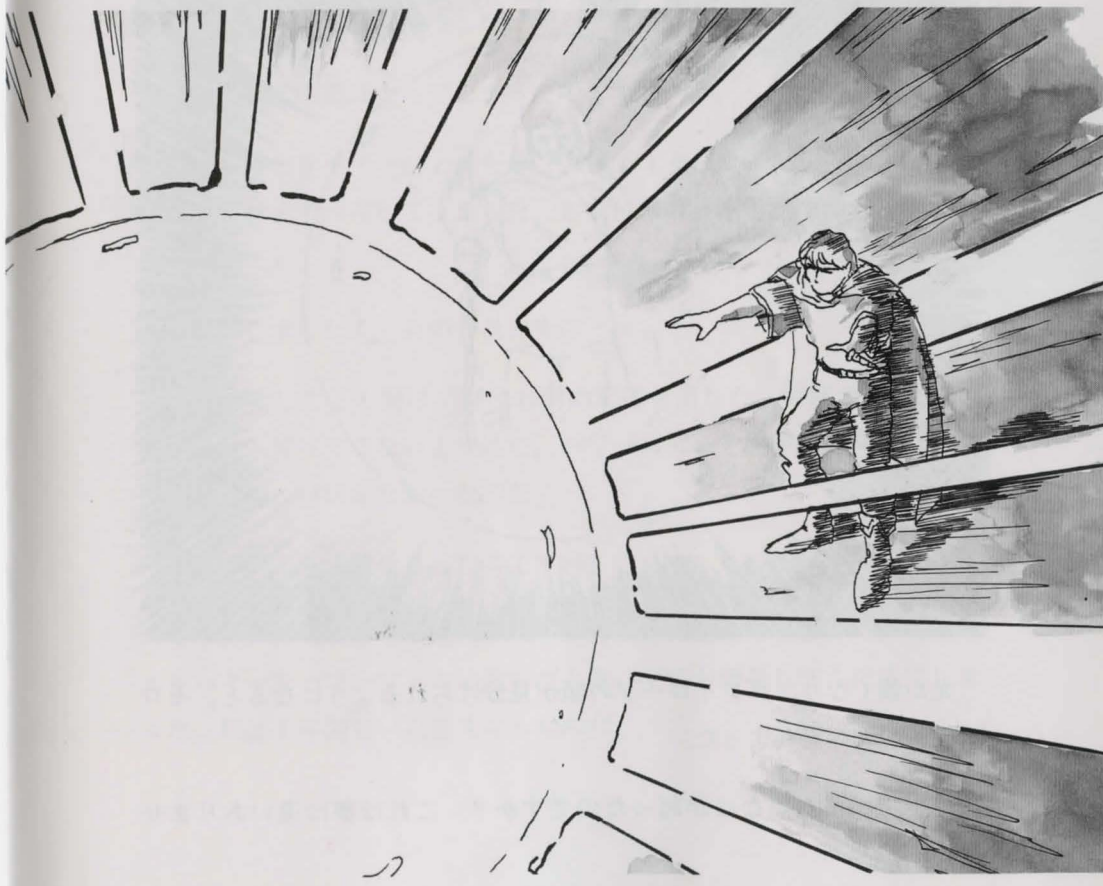
まわりを見回すと、いつのまにか彼はアナイアス山のダンジョンの前に立っている。

「誰だ！　悪夢の中で僕に話しかけているのは誰だ！」

これは夢でなく悪夢でもない。まことだ

「姿を現わせ！」

セロンはマントから腕を高く差上げると視覚の呪文を唱えた。すると丸い光が現われた。あれは、グレイロードのダンジョンにあった水晶球だ。

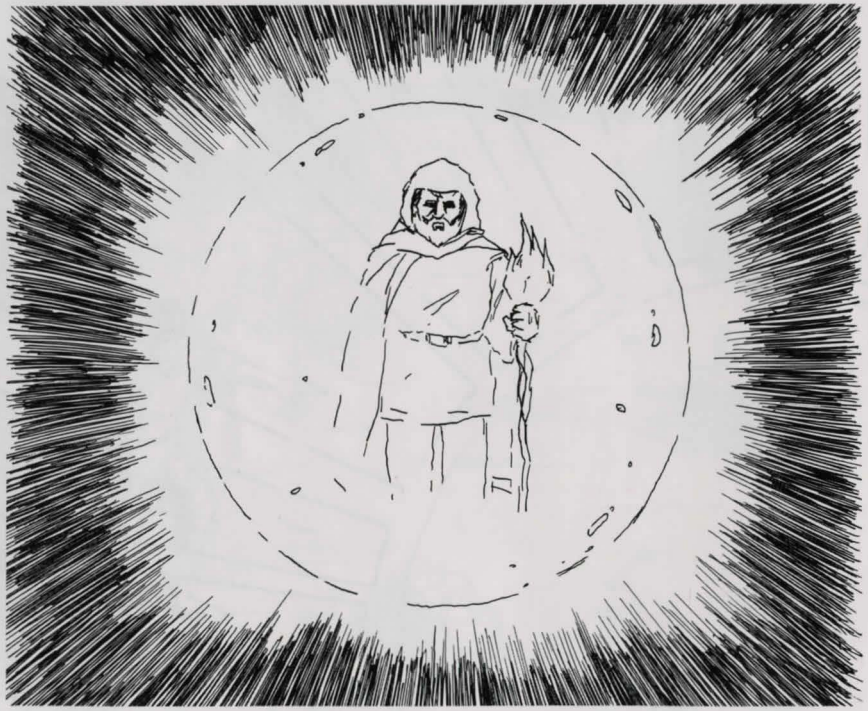


さらに呪文を唱え続けると、水晶球の中に白くぼんやりとした姿が浮び上がった。

セロン

セロンは後ずさりした。

「先生？　先生ですか」



光が強くなり、グレイロードの顔が見分けられるようになると、セロンは師の元へ走りよった。

「先生。いったいなにが起ったのですか？　これは夢に違いありません・・」

グレイロードは、いつもの灰色の衣ではなく白い衣をまとっている。顔が険しく見えるのはそのせいだろうか？　唇はまるで怒っているように堅く結ばれ、目は氷のように冷やかだ。

「よく聞くのだ。これは夢ではない」

「では、なにが起こったというのですか？」

「落着け！　うろたえている場合ではないのだ」

「わかりました」

セロンは自分の体を見降ろした。

「先生、私は幽霊になってしまったのですか？」

「私はあのときパワージェムを手に入れようとした。だが、夢中のあまり思わず口をすべらしてしまった。お前に私の計画を話すつもりではなかった・・」

「思い出しました！　あのとき先生は・・」

「静に、そしてよく聞け。私はお前の記憶を消した。お前が忠誠心から私の元へ戻ってこないようにだ。パワージェムを無事に手に入れられるかどうか、自信がなかったのだ」

「では、呪文を発見なさったのですね」

「そう、私は呪文をとなえた。だが、方法を間違えてしまった。呪文のエネルギーをパワージェムに注いだとき、宇宙が爆発してくだけてしまった。私は１年間盲いたままだったのだ」

「１年間？　私は１年も眠っていたのですか？」

「お前は眠ってなどいない。２つに分れてしまったのだ。お前の一部は、現実の世界にも存在している。

だからお前にたのみたい。私に代って奴を倒すのだ」

「誰を？」

セロンはまばたきして涙を押えた。２つに分れてしまったなんて・・。セロンは怯えていた。

「カオス(*Chaos*)だ、セロン！」

拳をにぎりしめ、天を見上げた。

「爆発が起きたとき、私も２つに分れた。私の邪悪な分身、それがカオスだ。自分でも気付かなかった暗く邪悪な私の半身だ。

カオスは今、人間を支配しようとしている。強力でしかも邪悪な力を使って、文明を破壊しようとしているのだ！」

「あやつはダンジョンを占領し、炎の杖を支配している。パワージェムもその手の中にある。だが奴はパワージェムを解き放つ呪文を修得してはおらぬ。私は呪文の手がかりを実験室に隠した。奴はまだ、それを手に入れていないのだ」

「私になにをしろとおしゃるのですか、先生」

師の姿がピクッと動いた。

「まず、私をグレイロードと思ってはいけない。私とカオスが一体となったものがグレイロードなのだ。私をリブラスルスと呼びなさい」

「わかりました、リブラスルス王。忠誠を誓います」

「よく言った。お前を頼りにしているぞ、セロン。私の手足に、そして目と心になってカオスを倒すのだ。

炎の杖が手にはいるまでは、私はこのダンジョンの入口にしか現われることができない。だから、お前がダンジョンに入って炎の杖を奪い、それをここに持ってこなくてはならない」

「でも、どうやってダンジョンに入ればよいのですか？　私も実体がないのではありませんか？」

リブラスルス王はうなずいた。

「そう、そのとおりだ。だが、私にはできないが、お前にはできることがある。」

師にできなくて、僕にできること・・？

「しかし・・」

「セロン、よく聞け。私はこれ以上この世界にとどまってはおれん。

私は何人もの勇者たちをダンジョンに送り出した。だが、カオスに捕えられ殺されてしまった。」

「全員ですか？」

「いくらか助かったものもいる。だが、彼らは修練が足りなかったのだ。気持を集中できなかった。宝を集めるために、味方どうしで戦ってしまった」

セロンはうなずいた。

「だから殺されたのですね」

「カオスは、そのうちの24人を、勇者の舘(*Hall of Chanpions*)と呼ばれる場所に吊るして魔法の鏡にとじ込めた。勇者たちは死んでいるが、死んではいない。ダンジョンに侵入してくる者たちへの警告として、そこに飾られているのだ」

水晶球が明滅し、リブラスルス王の姿がぼやけてきている。

「お前の進んだ技と知識をもってすれば、舘に入り込むことができるだろう。お前に4人の勇者たちを眠からさます力を授けよう。

だが、お前もまた、この世界では精神だけの存在なのだ。目覚めさせた4人は、お前の姿を見ることができない。精神の力で勇者たちを導き、炎の杖を取り戻さなくてはならぬ」

「でも、誰を選んだらよいのですか？　誰が新しく生まれ変るのかを決めるなんて・・」

リブラスルス王はセロンを無視して続けた。

「それから、勇者たちをお前の好きなように変える力を授けよう」

「なんですって！？」

「力あるものより賢いものが必要になるかもしれない。お前に似た若者を選びたいかもしれん。好きなように変えるが良い」

水晶球は激しく脈動し、ますます目に捉えがたくなっている。

「急げ、セロン！　世界を救う勇者を目覚めさせるのだ。だが、慎重に選べ。世界の運命は彼らにかかっているのだから・・」

「どうやって選んだら良いのですか？　私はどんな危険に立ち向かわなくてはならないのですか？」

「カオスは、秩序と平和を破壊した。奴は私の実験を悪用して、身の毛もよだつ怪物(*Monster*)を創り出している。お前の行く先はまさに地獄だ、セロン。だが避けられぬ・・」

水晶球が粉々にくだけちった。セロンは顔をおおって叫んだ。

「どうやって選んだら良いのですか！　わたしはどうすればいいのですか！！」

ダンジョンに行き、勇者たちを見るのだ

彼らの魂を覗き、だれが世界を救うに足るか見極めろ

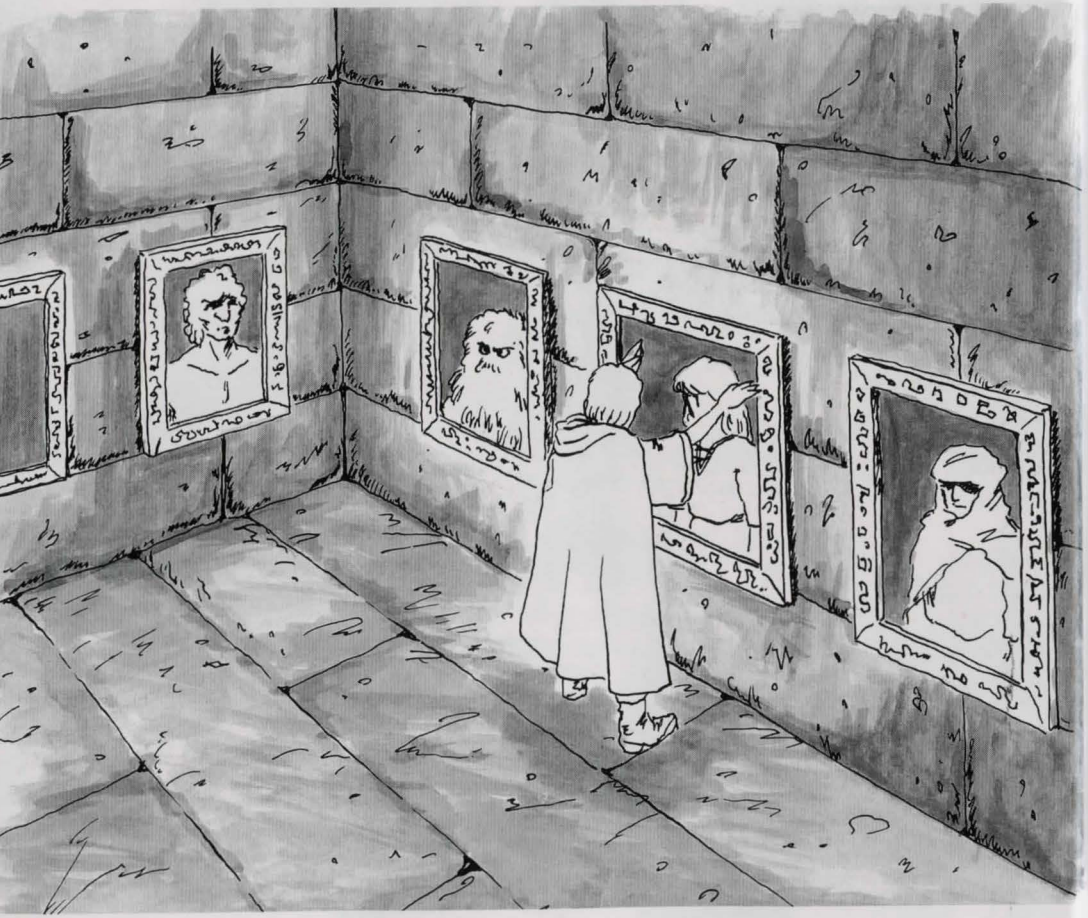
見るのだ

4. 勇者たち

彼は精神を送ってダンジョンの扉を越え、勇者の舘へ向った。あたりに立ち込める死の匂い。

それは入口にほど近いところにあった。石の壁に鏡が並んでいる。中から青白い顔をした勇者たちが、なにかを訴え掛けるようにセロンをみつめていた。

セロンは妖精(*Elf*)の前に立ち止まった。彼女は美しかった。ヴェイラにも負けないほどだ。それに、優秀な戦士(*Fighter*)としての特徴を持っている。



セロンは近付き、手を伸ばして彼女にさわった。すると、苦痛と恐怖に満ちた過去の情景がセロンの心へ流れ込み、幻覚のような風景が足下に広がった。

ドサドサッ、と下の方で音がする。見おろすと4人の人間がころがっている。その中にあの妖精もいる。

どうやら僕は、24人の死に様を目撃しなくてはならないらしい。セロンは暗い気持で思った。こうして彼らの魂を知り、どの勇者に生命を与えるかを決めなくてはならない。

「サイラ！(*Syra!*)」

下で若者が一声叫び気絶した。彼は盗賊(*Thief*)だ。腰の皮袋から宝石がこぼれでている。白い髭をはやし、予言者(*Prophet*)の衣を着た老人が太い木の梁の下敷になっている。老人は息もたえだえに言った。

「サイラ・・」

妖精が目を覚ました。

「ナビ！(*Nabi!*)」

彼女は老人の方へにじりよった。手は裂けて血が流れている。

ナビと呼ばれたその老人は、突然激しく咳き込んだ。

「・・地図を・・地図を落としてしまった。

すまん、なくしてしまったかも知れん・・」

「何だって！？」

体格のいい大男が、石をはらいのけながら立ち上がった。あれは、辺境の野蛮人(*Barbarian*)だろう。

「地図がないって？　この落とし穴の引金を引いただけでは気がすまんのかね？　え？リーダーさんよ」

サイラがたずねた。

「起き上がれる、ナビ？」

老人が首を振ると、彼女は泣き出した。

「まったく最高だよ、俺たちは。リーダーは大怪我をして、女はヒステリーを起こす。それにアレックス(*Alex*)はのびちまった！」

大男は気絶している若者を足でつついた。

「まだ、生きてるぜ」

サイラが心配そうにたずねた。

「アレックスはひどい怪我なの？」

「俺にわかるわけないだろ！　おれはプリースト(*Preist*)じゃないからな」

野蛮人はサイラの膝の上でぐったりしている予言者をあごで指していった。

「そいつも、もうダメなんだろ？」

「だまりなさい、ホーク！　ナビは私たちのリーダーなのよ！」

ホーク(*Halk*)はブツブツ文句をいいながら、アレックスの顔をたたいた。

「おい、起きろ。サボろうと思っても無駄だぞ。はやいとこ、この穴からずらかるんだ。」

サイラがナビに言っていた。

「私がもう少し治療薬(*Healing Potion*)を作っていれば・・」

「その通り」

ホークがアレックスのまぶたをこじあけながら怒鳴った。

「お前がもっと治療の呪文(*Healing Spell*)を練習しておけば、そのじいさんの予言力をもう少し長く利用できたんだ」

「口をつつしみなさい！　あんたの力をあてにしなきゃならないなんて本当に悔しいわ！」

サイラは腰の短剣(*Dagger*)に手をかけた。

「あんたには、もう我慢できないわ、この野蛮人！」

ホークはサイラを睨み付けて立ち上がった。

「おい、よく聞け。おれは、自分の技を磨いた。そして、怪物、オイツ(*Oitu*)とも戦った。歩くガイコツ(*Skeleton*)や、いままで見たこともない化け物を倒してきたんだぞ！」

ナビが弱々しく言った。

「わしだ。わしのせいじゃ。注意が足らなかった・・」

「いいのよ」

サイラが、ナビの額にかかる髪をはらいながら言った。

「暗闇で何も見えなかったんですもの。仕方ないわ。私はアレクスの様子をみてくるわね。動いてはダメよ」

サイラは立ち上がり、ギラギラした目でホークを睨みかえした。

「だいたい、あんたがあの箱を取りに行こうとしなければ、こんなことにはならなかったのよ！」

「俺には甲冑が要るんだ。それに食料が入っていたかもしれん・・」

気絶していたアレックスが、うなり声をあげて起き上がった。

「・・・なんだ、君たちは元気いっぱいのようだな・・」

「アレックス！」

サイラはアレックスに駆け寄った。

「みんな無事か？」

「ナビが・・」

アレックスはナビの方を見た。

「ナビ、大丈夫か？」

「アレックス、地図を作るんじゃ。地図がなくてはこの地下道を通り抜けることはできん」

アレックスはうなずいた。

「みんな、とにかくこの穴から出よう。僕がナビを背負うよ」

「早くしろ！　俺たちにはモタモタしているひまなんて無いんだぞ」

彼らは、落とし穴をよじ上り、地下道へ出た。地下道は真っ暗だ。

「どっちへ行きましょうか？」

サイラはナビを見たが、彼はアレックスの背の上で気絶している。すると、ホークが言った。

「俺はあっちへ行くぞ。魔法の剣と、甲冑があるかもしれん」

「仕方ないわね。じゃあ行きましょう」

彼らは地下道を進んでいった。セロンは、なすすべもなくそれを見守るだけだった。いやな予感がする。セロンは彼らに注意したかった。それ以上進んではいけない！・・

ホークが突然、前を指差した。

「おい、あれは剣じゃないか。魔法の剣だ！」

たしかに、光る物が見える。ホークはそれに向って駆け出した。

「待て！　それはワナかも知れない！」

アレックスが怒鳴ったが、もうすでにホークは剣の柄をにぎっている。

「なにがワナなもんか！　あとは甲冑さえあれば、オレは透明になれるぞ。見ろ、これを！」

ホークが剣を振り上げた。すると地下道が激しく振動した！

「やっぱりワナよ！」

「逃げるんだ！！」

暗闇から怪物が現われた。かつては人間だったそれは、いやらしいうすら笑いを浮かべている。

「ダメ、もう間に合わないわ。戦うのよ！」

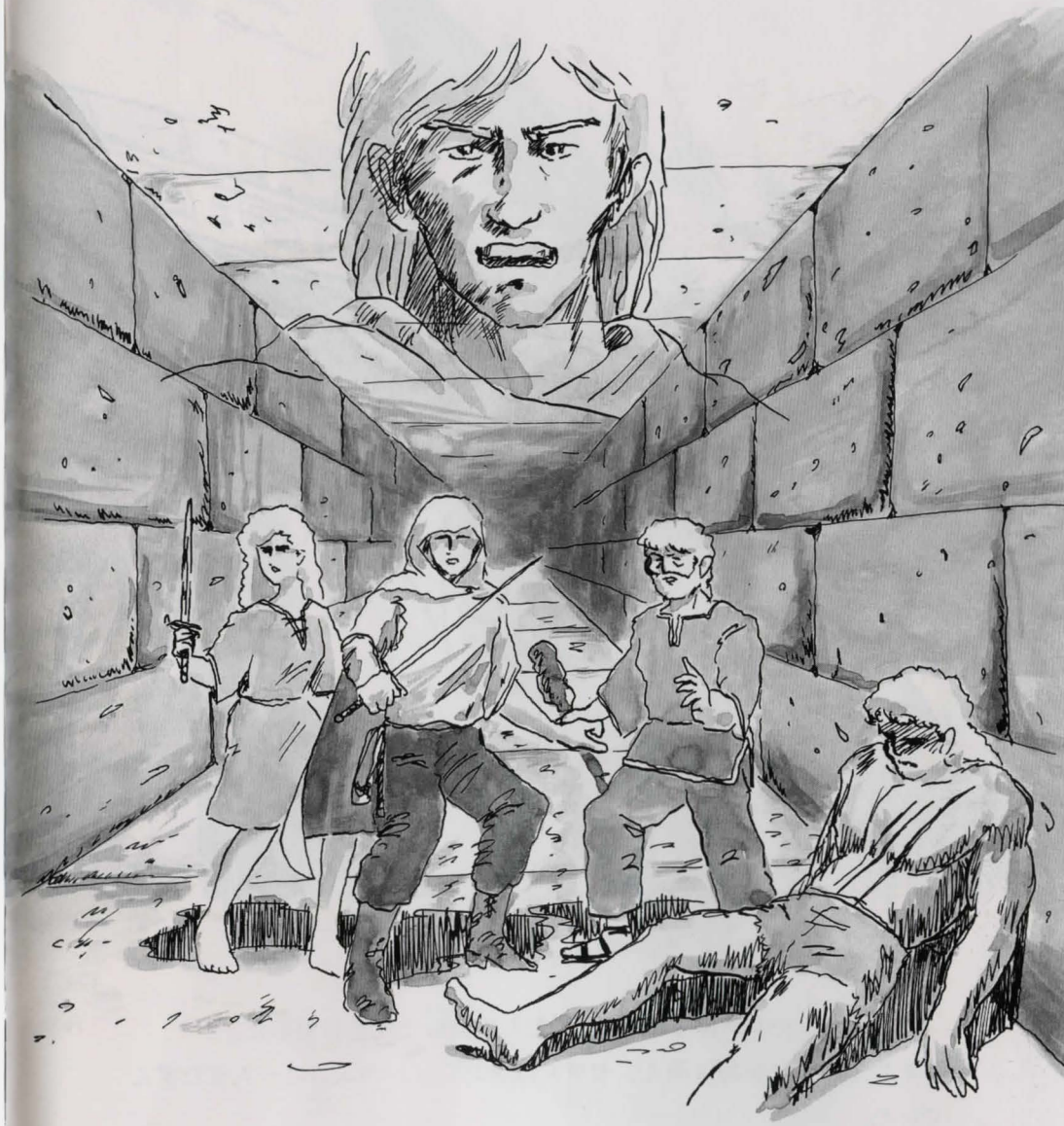
ホークが叫んだ。

「だめだ、俺には倒せねえ。誓っていうが、こいつらを殺れるだけの戦いの経験がねえ！」

ホークは絶望のわめき声を上げると剣をかまえ、怪物に飛び掛かった！！

もう、彼らに生残るすべはない。セロンは我知らず叫んでいた。

「ダメだ！　いけない！！」



こうして、セロンは24人の勇者たちの勇敢（ゆうかん）な死を目撃した。

そしていつしか幻は消え、セロンはダンジョンの入口に一人立たずんでいた。

ダンジョン・マスター

ストーリー編

COPYRIGHT 1989,
SOFTWARE HEAVEN, INC. /FTL GAMES
-LICENSED IN JAPAN IN CONJUNCTION
WITH JP INTERNATIONAL

富士通株式会社